

葉を摘みとると 苗木が活着しやすくなる



写真1 近年全国的に苗木生産量の増加と流通の拡大が求められている

苗木葉量を減らして活着率を改善する

植物は葉で蒸散（気孔を通じて水蒸気を放出すること）や光合成をおこなうため、葉の量や質は苗木の活着や成長に直接影響します。山出し苗（実際に山に植栽される苗木）は、移植の際にどうしても根が傷つくため水分吸収機能が低下し、葉からの蒸散によってさらに水分不足が進みます。そこで、葉の量を調整することにより、苗木の水分バランスを保ち、活着率の向上に役立てることができると考えました。



山下 直子

関西支所 主任研究員

ヒノキの裸苗（畑から掘り取り根がむき出し状態の苗）の樹高に対して下から25%、50%、75%の葉を摘んで植栽したところ、摘葉の割合が高い苗木ほど、植栽後の活着率も樹高成長も優れているという結果が得られました（図1）。苗木の下部の古い葉は植栽後の適応能力が低く、あらかじめ摘んでおくことで、植栽時の水分ストレスが軽減され活着率が向上したと考えられます。一方、コンテナ苗（樹脂製のコンテナで育成された根鉢の発達した苗木）は、摘葉する、しないに関わらず、活着率は高く、もともと水分ストレスを受けないことが分かりました。



写真2 大きくなり過ぎた苗（右）は廃棄されます。左は出荷に適したサイズの苗木

枯れにくい苗木づくりを目指して

日本の森林の多くは本格的な利用段階を迎えており、主伐・再造林を進めて林業を成長産業化する必要があります。伐採後の再造林を進めるうえで、苗木生産や流通の拡大だけでなく、苗木の品質管理が重要となります。

降雨の少ない季節や乾きやすい場所に植栽する場合や、枝葉の多い大苗等を植栽する場合には、植栽時に葉量を減らすことによって活着率を高めることが大事です。また、大きくなり過ぎた苗木

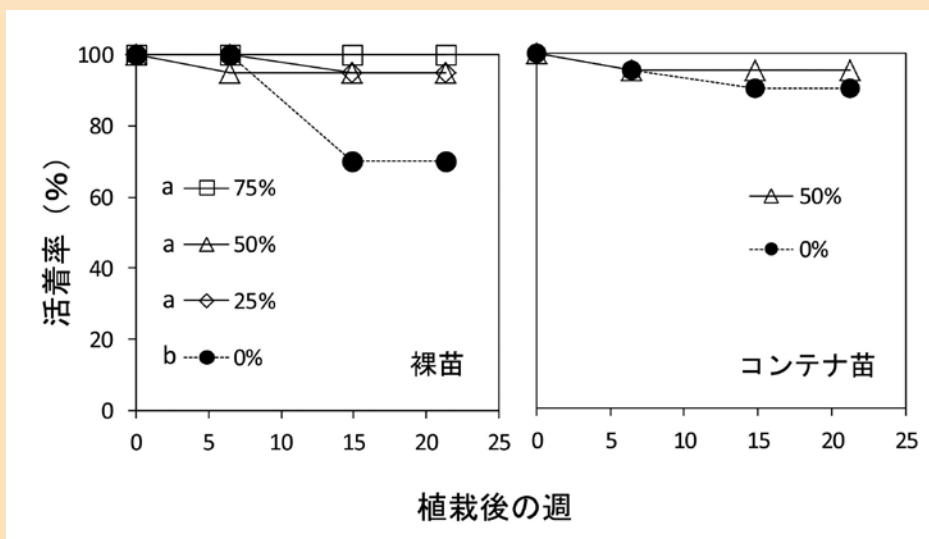


図1 ヒノキの裸苗を樹高に対して下から25%、50%、75%の葉を摘んで植栽した後の活着率は、摘葉した割合が高いものほど高く、全く摘葉していない苗（0%）では、植栽後22週間経過した時点で約70%まで減少した。一方、コンテナ苗は摘葉の有無にかかわらず活着率は高い（Yamashita et al., 2016を改変）。

は出荷されずに廃棄処分されてきましたが、この手法を用いることによってこれらの苗木の有効利用にもつながります。また、コンテナ苗は、降雨の少ない季節や乾きやすい場所に植栽する場合に有効であると思われます。現在、地域の気候と苗木の水分調整能力の評価に基づいた苗木の植栽管理スケジュール作成のための技術開発に取り組んでいます。